佳作

家族の絆

埼玉県　杉戸町立杉戸中学校一年　黒田　琉生

僕の家族は、母と双子の兄と祖父と祖母の五人家族です。父は僕が一才の時に家を出てしまったので、父との思い出はありません。

去年の夏に、大きく日常が変わる出来事がありました。毎日の散歩を日課に元気だった祖父が突然たおれてしまったのです。いつも穏やかな祖母が慌てている姿に、僕は祖父の身に重大な事が起きたのだと察しました。母は冷静な態度で救急隊員に説明をしていました。祖父を乗せた救急車はサイレンを鳴らしながら、住宅街からスピードをあげて消えて行きました。僕は、サイレンの音が小さくなるまで見送りました。その日は、とてつもなく夜が長く感じました。やがて、母と祖母が深刻そうな表情で僕に言いました。

「おじいちゃんは、とても難しい手術をしたの。家族で力を合わせれば、おじいちゃんはまた元気になって家に戻って来れるのよ。」

と言った祖母の目には、うっすらと涙が光って見えました。

夕方になると山の方から涼しい風が吹き、リーンリーンと鈴虫が鳴いています。僕は、母と祖母が病院へ行っている間に、洗濯物を畳んだりご飯を炊いたりして帰りを待ちました。母と祖母から、

「協力してくれてありがとう。」

の言葉にこそばゆくなるのです。僕はいつの間にか、家の手伝いをする事が日課になっていました。

僕が学校から帰宅すると、部屋の中から明るい笑い声が聞こえてきました。楽しそうに明るい笑い声は、僕の知っている散歩の好きな元気な祖父の笑い声でした。母も祖母も、とても柔らかい表情です。僕も嬉しくなり、一緒に笑みがこぼれました。その日の夕食は、僕の大好物の祖母の手作りしたお赤飯をお腹いっぱいになるまで食べました。

家族の絆について、僕は考えてみました。辛い出来事を乗りこえる時も、嬉しい出来事を共感し合う時も、独りでは味わえないのです。家族の存在があるから絆が生まれます。祖父は身体が不自由になっても、日課である散歩を楽しんでいます。

僕は中学生になり、将来をみすえて祖父と祖母と離れて暮らす事になりました。僕は、家族が離れて暮らす事に反対でした。なぜなら、祖父と祖母が居ない生活に、心にポッカリと穴が空いてしまうように感じたからです。そんな僕の背中を押してくれたのは、祖父と祖母でした。

「離れて暮らしていても家族の絆は切れないのよ。」

と、僕の両手を握り締めながら言いました。祖母の優しい温かい手は、いつも以上に優しく温かく僕の心も温かく包みました。

これからも、家族を大切にしていきたいと思います。